

出世の極意

ルイ・ヴァイトン
元CEOが教える

■ルイ・ヴァイトン
元CEOが教える
出世の極意
マーク・ウェバー(著)

どん底の行動で決まる真価

れる。

しかし、本書のハイライトは「成功体質」の著者が経験した挫折にこそある。LVMHに登用される前、彼はアメリカの有名紳士服メーカーに30年以上勤め、CEOにも就任していた。しかし、取締役会から突然解任され、50歳を超えて求職活動に身を投じることになる。知人やヘッドハンターにみずから電話をし、失望と希望を行き来しながら、自分への信頼と評判を取り戻していく彼。その過程で得

たもう一つの極意は、「人間の真価は『どん底での行動』で決まる」という、米陸軍の英雄、パットン將軍の言葉だ。

ただ、全体に既視感が漂うのはなぜだろう。トルストイをもじれば、「成功はどれもみな同じように見えるが、挫折はそれぞれに形がある」。となれば、「挫折の洞察」を描けば、もっと印象的な本になったはず。(須川綾子訳、飛鳥新社・1500円)

清野 由美

(ジャーナリスト)

「『そこそここの成功』しか目指さないヤツは、『そこそここの成功』すら手に入らない」

NY・ブルックリンの貧しい家庭で育った若者が、世界一の高級ブランド企業体「モエ・ヘ

ネシー・ルイ・ヴァイトン(LVMH)の米国法人CEOにまで上り詰めた。人も羨むその「出世の極意」が冒頭の一句だ。以下、本書には努力とタフネスに満ちた著者の信条が記さ



■零戦少年
ゼロセン

葛西りいち(作)

滑稽と悲惨 等身大の戦争

戦後70年の夏、まんがでも戦争を意識した本がいくつかに目についた。中には『原水爆漫画コレクション』全4巻(平凡社)という、ずっしり手応えのある重量級の企画もあり、他にも単

行本や雑誌の特集など、戦争の重さを受けとめた本が書店に並んだ。その中で少しムードが違ったのが『零戦少年』だ。エッセーコミックのスタイルで描かれていて、軽い気持ちで

手に取り、さっと読み始められる。内容は、31歳の著者が、零戦乗りだった祖父から聞いた戦争体験を描いたもの。表現がギヤグまじりの上、そもそも祖父自身が「成り上がりたいその一心だけで」海軍に志願し、女にモテて恩給をもらう人生を思い描いていたというのだから、ず

しろこのまんがのスタイルだからこそその説得力が生まれる。肩に力の入りすぎた表現では描けない、普通の人の等身大の語り。戦争のことを語りながらなかったという祖父が口を開いて語った、滑稽さと悲惨さが紙一重の戦争の現実が、まっすぐに伝わり、印象深い。

ノリとツッコミのきいた、軽くて重い読み味の一冊だ。

(秋田書店・607円)
ササキバラ・ゴウ
(まんが編集者)